



Department of
Culture and the Arts

Decibel New Music Ensemble

@ Kunitachi College of Music

レクチャー

「ジョン・ケージ作品集：Variations のデジタル楽譜化について」

コンサート・プログラム

アレクサンダー・シグマン

fcremap' dB

仲井 朋子

SENTOUCHŪ

リンゼイ・ヴィックリー

東京鳥音箱舟

高橋 溪太郎

A Short Story of my Sketches

平山 晴花

形態化の実践のための：ある日

キャット・ホープ

Majority of One

レクチャー解説

ジョン・ケージの8つの Variations (1958-67) は彼の一連の作品群の中でもユニークな存在である。1950年代後半までに、彼は不確定な音源(ラジオやレコードなど)の使用や、新しい記譜法の創出とそれによる不確かな音楽的結果を求め、多様な「偶然の作用」について研究し、発展させてきた。その後、ケージの興味は音楽の形式構造自体の“柔軟性”へと向けられ、8つの Variations は、彼にとってそのアイディアを実践する主要な手段となった。

Variations で、ケージは楽器編成、音素材、演奏空間、そして環境についての研究を拡張した。この一連の作品は、演奏者と楽譜による“パーソナル”な音世界からグローバルな尺度における音の全体性を潜在的に受け入れようとする視野への進化を示している。星図を基に完全に記譜されたオーケストラ作品、Atlas Eclipticalis (1961-62) 以後、彼の作品は、彼が言うところの“music (not composition)”へと徐々に移っていった。事実、Variations V と VII は、彼と彼の学生により 1950年代後半に確立された芸術形態の一つである「ハプニング」であり、そこでは経過する時間という概念は何らかの形で抑止されている。

全ての Variations を一つのコンサートで演奏する試みは、Decibel が初めてであり、その実現の鍵となったのは I, II, III, VI のための iPad 用リアルタイム・スコアと、IV と V のための演奏マップの開発であった。オリジナルの楽譜である透明シートから切り取られた断片の角度を測りマッピングしてゆくという複雑な作業は、コンピュータにより実行され、即座に演奏可能な譜面、または演奏プランが生成されてゆく。また、VII は通信手段において新しいテクノロジーを活用するようにアップデートされ、VIII は、ケージの根本的な音楽への探求についての完璧な結論を提示している。

Decibel は、Variations に対する特別な親近感や各作品への強い興味から、この意欲的なプロジェクトに着手した。一連の作品が必要とされる素材は、ケージの、そして Decibel のテクノロジー、音響空間デザイン、マルチメディア、ハプニング、そして“大気中の”音に対する関心を表している。この作品を準備する段階で、テクノロジーが主導する芸術作品における“真正な”演奏であるか、“その当時の”演奏であるかという疑問がわいてきた。つまり、何時、最新技術と新たな可能性を、“新しい”ということが必要不可欠なコンセプトであった作品に対して応用すべきかという疑問である。Decibel は、作品の魂を傷つけることなく、新しいテクノロジーを組み入れる一方で、作品が初演された当時の楽器を使用するなど、さまざまな手法を結合させた。

「コンプリート・ジョン・ケージ・ヴァリエーションズ」は、2012年2月に Decibel のヨーロッパツアーにおいて、「ジョン・ケージ生誕100年」フェスティバルの一部としてパレルモ(イタリア)のゲーティ・インスティテュートで初演され、これまでにオーストラリアやイタリアの各地、マレーシア、アメリカでも演奏されている。また、ニューヨークの MODE から同タイトルの CD が発売されているほか、ペーターズより iPad アプリがリリースされている

コンサート曲目解説

アレクサンダー・シグマン fclremap' dB (2016)

fclremap' dB はアニメーション作家である Eunjung Hwang とのコラボレーションで製作したアニメーション/エレクトロニクス作品 Future Creatures からの音と視覚要素を再マッピングすることによる作品シリーズの一部である。作品は、フルートとクラリネット属に属する全ての楽器、ピオラ、そして打楽器によって演奏される。フルート、クラリネット、ピオラパートに図形楽譜が用いられている一方、打楽器奏者は、その楽器の特性と、アンサンブルにおける支えとしえの機能を持たせるという意味合いから、(比較的ではあるが) 厳密な楽譜が用いられている。

作品は6つの均一な長さを持ったセクションに分けられ、それぞれに固有のエレクトロニクスのレイヤーが割り当てられている。これらの個々のセクションにおいて、フルート、クラリネット、ピオラパートは Future Creatures から派生した静止画、そして静止画上に消去パターンを描く輪郭と一致している。パーカッションパートでは、それぞれの輪郭が衝撃の密度と配分に影響する。エレクトロニクス音はスネアドラムとカリンバ、そして PA システムに取り付けられたトランスデューサーと通して投影される。そのことにより、楽器と電子的に発生した音のマテリアルがより密接に結合されている。

アレクサンダー・シグマン

表現メディアを問わず受賞歴のある彼の様々な音楽作品は、これまで世界中の主要国際フェスティバル、展覧会や研究機関等で取り上げられてきた。また、IRCAM 研究所を始め、フランス、ドイツ、アイスランドでの研究や創作のための様々なレジダンスプログラム、フェローシップにも選ばれている。スタンフォード大学にて博士号取得。現在、山梨学院大学国際リベラルアーツ学部音楽准教授。

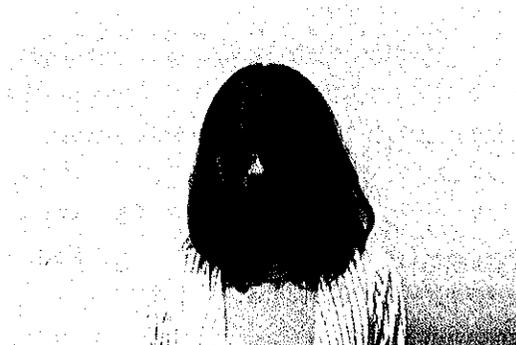
lxsigman.com



仲井 朋子
SENTOUCHŪ (2016)

SENTOUCHŪは、数値から生成された詩をヴィジュアルライゼーションし、音楽語法で詠む作品である。普段、絵を描く手段を持たない作曲家にとって、通常の作曲手段である数と音をダイレクトに視覚要素につなげるアイディアは、極自然なことだった。そのためこの作品において自身が描いた線は一本もない。数値が図形に置き換わったとき、まずはスコアとして紐解くことが要求された。一本づつパート分けを行ったスコアは、曲中の所在を見失うほどにひたすら反復にしか見えないのだが、僅かな変化を正確に音楽に置き換えることで、元々の詩の構造が浮かび上がるのではないかと想像している。基となる生成された詩は、詩人の松井茂氏から提供していただいた。

仲井 朋子
テクノロジーを軸とした音/音楽作品を国内外で発表している。またジャンルを横断する作品も多く、近作に青森 EARTH2014 (青森県立美術館)、マテリアライジング展III (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA) でのインスタレーションなどがある。国立音楽大学、同大学院音楽研究科修了。東京藝術大学芸術情報センター、洗足学園音楽大学各講師。
tomokonakai.com



リンゼイ・ヴィックリー
Tokyo Avian Sound Ark (2016)

Tokyo Avian Sound Ark, composed for bass flute, clarinet, viola, cello and electronics, continues composer Lindsay Vickery's exploration of "field recordings" as a musical source material. In this work a recording of the sonic environment outside Tokyo was processed electronically to create a polyrhythmic web of sound that strangely echoed the Sen no Ongaku (linear music) style explored by Jo Kondo in the 1970s. In recent times Vickery has developed processes for transcribing sound into scores that draw out prominent auditory events and notate them, allowing live performers to engage ephemeral and complex sounds in a precise manner. In Tokyo Avian Sound Ark, clarinet, harp and electric guitar highlight the ever-changing cross-rhythms of the electronic part to create a hybrid work part, field recording, part electronic work and part chamber music.

リンゼイ・ヴィックリー
作曲家、演奏家、研究者。Decibel など4つの国際的現代音楽グループを率いる。これまでアコースティックと電子楽器のために書いた曲は150を超える。特に楽譜と音楽構造のプレゼンテーションモデルに興味があり、奏者とエレクトロニクスを協調させる最新の方法論について国際会議などで精力的に発表している。Edith Cowan 大学西オーストラリア・パフォーミング・アーツ・アカデミー准教授およびコーディネーター。
lindsayvickery.com



高橋 溪太郎

A Short Story of my Sketches (2016)

A Short Story of my Sketches は、思い浮かべた音楽の断片のスケッチと、その作業模様をストーリーにしたて、一枚の画像にまとめたものである。

私は主に室内楽の作曲をすることが多い。作曲をする過程で、一つ一つの音、音列、和音、リズム、音響など様々なことを少しずつ創っていくが、その全てを初めから細部に到るまで思い浮かべるのは難しい。まずは小さな音楽的なアイデアを、最小限の音符を使い、簡単な音の流れとして書き留めていくことが多い。

スケッチしたアイデアは、数日経てば忘れてしまうことが多く、一つ一つの音符や線が、何を意味しているかを再度分析することもある。スケッチは所々書き直しの後が目立ったり、描写が具体的であったり、また反対に曖昧であったりする。具体的な箇所は多くの音符が規則正しく並んでいたり、意図する音量の大きさ、演奏の激しさによって筆圧が変化するものだ。そのような箇所こそ重要なアイデアだと思いがちだが、実際に興味深い音楽になるのは、曖昧に記録された部分であったりもする。

この作品では、スケッチをありのまま提示し、実際は自分がそれらを再度解釈し、楽曲として仕上げて行くところを、演奏者が自由に解釈して演奏することとした。また、スケッチの際に行った散歩やコーヒーブレイク、つまみ食いなどの履歴も残した。極端に個人的な好奇心をひけらかすのに躊躇いもあったが、よくよく考えてみれば、私の作曲活動を端的に象徴していると思い、そのままとした。

高橋 溪太郎

作曲家、メディアアーティスト、プログラマー。1986年生まれ。2009年に国立音楽大学卒業後、スイス、バーゼル音楽院作曲科に留学。修士修了後、現在博士課程在学中。ヨーロッパを中心に室内音楽、電子音楽双方の分野で活動しており、彼の作品は、入野賞やスイス Christoph Delz 財団による作曲家賞を始め、世界各国で入賞、入選している。

neoterize.net



平山 晴花

形態化の実践のための：ある日 (2016)

この作品は、今年9月にオランダのエイマイアンの海岸を訪れた際に撮った画像を元に、その場所の実際の景色と同海岸の空想的なイメージを重ね合わせながら制作された。特に冒頭に現れる二つの塔のようなものは、実際にその場所に存在するランドマーク的オブジェである。また、楽器パートの記譜はペイント風に描かれ、全く異なる性質の画像を組み合わせながら、それらがパフォーマーたちの解釈を通して最終的に音として、また、どのように演奏空間を定義づけていくのか試みられている。

今年に入り、脳波を用いたインタラクティブ音楽作品や、今作品のように、最終的に音となるそのプロセスにおいて、自身の意図だけでほとんどコントロールできないメディアやそれらの複数の作用による作曲アプローチに興味があり、今後さらにこの作品の発展形として、画像からの音生成や、画像によるパラメータのコントロールなど、エレクトロニクスと結びつけながら演奏空間全体を含めたアウトプットの実験を続けたい。

平山 晴花

作曲家、演奏家。国立音楽大学大学院修了。マンチェスター大学電子音楽作曲専攻にて博士号取得。インタラクティブ音楽作品を中心に、創作研究活動を行っている。作品はプールジュ国際電子音楽コンクールなどでの入賞の他、国際フェスティバルや国際会議等でも多数取り上げられている。また、ストックホルム電子音楽スタジオ (EMS) でのレジデントや、様々なアーティストとのコラボレーションなど、活動は多岐にわたる。東京電機大学研究員。

harukahirayama.com



キャット・ホープ
Majority of One (2016)

This work, composed for bass clarinet, bass flute, cello, viola and electronics, is part of a series that explores the power of limited materials. Each instrument has a very limited and restricted range in the piece, but explores it through the timbral variation of pitch bending and extreme, constant, smooth control of microscopic change. This is also realized in a scored 'room feedback' part that engages the harmonic qualities of each venue the piece is played in. From an interview with David Charlton, Jolyon Laycock and Morton Feldman in 1966, the year of Hope's birth: C: Do you think that indeterminate music, your music, is for yourself or for everybody? MF: I think it is for everybody; I think that all art has its special audience. You have the certain types of faces that you see at a Renaissance concert, at a Wagner concert. It has its audience as well as any other music has its audience. All audiences are departmentalised; so I think it is a kind of fantasy to think of a "serial" audience. I met someone who could only listen to Mendelssohn: he was an audience of one. L: As long as you have an audience, no matter how large or small it is, your music has a reason. MF: Well, one is a majority of one! [CH: But one is a dangerous number]

キャット・ホープ

研究者、作曲家、演奏家、ソングライター、ノイズアーティスト。フルート及びベース奏者であり、Decibel ではさらにディレクターも務める。2011年と2014年に、実験的音楽の APRA | AMC Award for Excellence を受賞。また、2014年の Peggy Glanville Hicks composers house でのレジデント他、最近では、Civitella Ranieri や Churchill Fellowships にも選ばれた。Edith Cowan 大学西オーストラリア・パフォーマンス・アーツ・アカデミー准教授。

cathope.com



デシベル現代音楽アンサンブル

キャット・ホープ (フルート、ベースギター、アーティストック・ディレクター)
リンゼイ・ヴィックリー (クラリネット、プログラミング)
アーロン・ワイアット (ビオラ、プログラミング)
スチュアート・ジェームズ (打楽器、プログラミング)
トリステン・パー (チェロ)
ローラ・ボインズ (ダンス)

西オーストラリアを拠点に、楽器とエレクトロニクスの融合、図形デジタル楽譜と作曲/演奏の拡張性を探求する現代音楽アンサンブル。2009年の結成以来、世界各国での公演、60曲を超える委嘱、5枚のソロアルバムのリリースなど活動は多岐にわたる。また、携帯型スコアフォーマットとネットワーク同期演奏環境を応用した新しい図形デジタル楽譜 Decibel ScorePlayer (iPad アプリ) の開発も手がけ、商品化されている。

<http://www.decibelnewmusic.com>



2016年12月15日(木) 18:15 開演
国立音楽大学6号館 110 スタジオ

主催：国立音楽大学創作科目会・コンピュータ音楽研究室
協力：西オーストラリア州政府文化芸術省

